

## 1.1. ウィーン便り (1) —— 国際原子力機関 ( I A E A ) に勤めて : 職場編前編 (2000.12) ——

日立事業所燃料サイクル部 小西俊雄

ほぼ6年前の1995年8月末、ウィーンの国際原子力機関 ( I A E A ) の勤務に就くため3年の予定で成田を飛び立った。深く関わってきた高速増殖原型炉「もんじゅ」が初めてその電気を送電線に送る初併入の翌日だった。多くの会社幹部、同僚そして役所の人たちの後押しを頂いて日本を後にした。勤務が延びる間にこの3月 (2001年) に日立の定年を迎えることになった。(写真、国連ビル群 : 右上の二棟が I A E A ビル)



これを機に報告とお礼を兼ねてこれまでの I A E A 勤務を振り返ってみたい。国際化の中で、同じような道を目指す人がいても良い、いて欲しいと思うので、その参考になることも期待している。職場編と生活編に分け、先ず職場編から。

## ・ I A E A 赴任

1994年末私は当時の日立工場原子力開発部から東京青山の高速炉エンジニアリング株に出向中だった。そこでの主要業務対象であった敦賀市の「もんじゅ」はその年の春に臨界を達成して、立ち上げの主体はメーカーの手から離れていた。そして私は自分の新しい進路を考えていた。そんな時に「 I A E A 勤務」の可能性を勧めてくれる人が居て気持ちが傾いた。会社幹部や役所の支持も頂き正式に応募したのが 1995 の年明けだった。5月に面接のため渡奥し<sup>1</sup>、一か月後に「採用通知」を受け、出向先からの帰任、 I A E A 赴任と、慌ただしい日を送った。多くの人が開いてくれた歓送会は今も心に鮮明である。

社内の多くの方から頂いた餞別金は、現地国連ビルを描いて画展特選作品に選ばれた油絵の購入にあてさせて頂いて今は自室の壁を飾っている。

## ・ ウィーンと国連

ウィーンはオーストリアの東端にある。もちろん「西ヨーロッパ」に属するが、地図で見るとベルリンやプラハよりも東に位置する。ウィーンの街は周囲約5キロの環状道路リングシュトラーセで囲まれる旧市街を中心に広がる。この環状道路は王宮を囲むかつての城壁の跡である。時計に例えるなら中心にステファンス教会、6時の位置にオペラ座がある。年中イベントが開かれる広場のある市庁舎は9時、空港バスターミナルは3時になる。時計の上方をドナウ河が北から東に斜めに流れている。ドナウ河から支流の形で分岐した運河が環状道路に接するように流れている。「第三の男」が最後を迎える地下道はこの運河と一体である。

ウィーンはニューヨーク、ジュネーブに次ぐ第三の国連都市である<sup>2</sup>。 I A E A 以外に、 UNIDO (国

<sup>1</sup> 応募者は30余名いたらしい。書類選考のあとの面接は業務経験と合わせて語学力を評価する色彩が強い。私の場合、この面接は効果があったようだ。

<sup>2</sup> 国連をウィーンに招致するに際して有名な演説がある。オーストリアの当時の外務大臣 (のち首相) が国会の説得にあたり、「国連組織を持つ方が軍隊を持つより国の安全に有効」と言ったのだ。名言だと私は思っている。招致のためにウィーン市は三つの旗印を掲げたという。英語の普及、交通網の整備、それに街の安全。私はもう一つ加えて良いと思っている。国連都市の地代が年間1シリング (約7円)。

連工業開発機構)やCTBTO(包括的核実験禁止条約準備局)、UNDCP(国連薬物統制計画)など他の国連機関の本部もある。また、WHOやUNICEFなどの連絡機関も機能している。全体で3000人とも4000人とも言われるから、その家族を含めるとウィーンの人口170万の内約200人に一人が国連人である。今の国連は2時の方向に河を越したところにある。ここに特徴ある形の国連ビルが建ったのは約20年前、それまではオペラ座から少し東、5時半の位置に建つビルがIAEA本部だった。今の全日空グランドホテルである。

国連ビルには各国から出資金以外に各種の寄贈品が寄せられる。歴史的記念品や芸術品などが多い。正面ゲートを入ると寺院を思わせる釣鐘がある。日本からの「ピースベル」で、その贈答式が横綱貴乃花を迎えて開かれたのは私の着任直後だった。館内には中国からの兵馬俑一組、ハムラビ法典を刻んだバビロニアの石碑、また、アフリカの民芸品や造形美に富む彫像など目を楽しませてくれる。鳳凰を描いた大きな日本画も中央棟の壁を飾っている。

#### ・ IAEA組織と運営

IAEAは米国アイゼンハワー大統領の有名な演説「アトムズ・フォア・ピース」が礎になって一九五七年に発足した。国連組織の一部であるが、独立性を重視した位置づけにある。現在の規模は、加盟国132、年間通常予算約230億ドル、他に特別予算約100億ドル。人員は事務局長(現在はエジプト出身のエル・バラダイ)を筆頭に職員約1800人に加えて各国からの自弁派遣者が約500人。設立の趣旨から、「原子力平和利用の推進とその担保」が活動の柱である。推進と担保の比率は時代背景とともに変遷し、今は「安全、保障の担保」に重みがある。年間予算は各国の出資金で賄われ、その20%は日本が分担している。し



かし日本人職員は僅か20余名<sup>3</sup>であり、もっと多くの職員が欲しいところだ。ここでの経験を帰国後の職場で反映できる年齢層も含めて、情報収集、ビジネスの畑作り、種まきのためもっと応募者がいてもよい。(写真、IAEA棟入り口に立つ加盟国の旗)

予算と業務内容は秋の年次総会の承認を得て実行に移される。総会の全体セッションは各国の代表が国の動向報告やIAEAへの要望等を正式に述べる華やかな場である。元首級の代表が登場する例も多く、日本は概ね科学技術庁長官が国を代表する<sup>4</sup>。実務的な議論は総会と並行して開かれる部会でなされ、私の担当する「原子力淡水化(後述)」も毎年ここに報告されて、それ以降の作業への要

<sup>3</sup> この他に約20名の自弁派遣者(コストフリーと呼ばれる)がいる。電力会社や役所からの人が中心。他の国連機関も含めるとウィーンでの日本人職員は自弁派遣者を含めて100人弱である。それにしても少ない。「日本人職員の増員」は国連代表部の大きな課題で、採用側とも協力して対策を講じている。応募者自体の少ないのが悩みと聞く。「国際社会で働きたい」と思う人、特に若年・中堅層はこの追い風を利用したら良い。日本人職員の適正数は約200人とされている。最大の壁は「復帰後の職場」への懸念とやはり語学か。

<sup>4</sup> 日本のように国の顔が毎年変わる国は少ない。報告が日本語でされるのが通例なので会場での私語、離席者が増えるのが残念である。皮肉だが、1999年総会中に発生したJCO臨界事故直後に開かれた臨時特別報告の会場は取材陣も含めて盛況であった。なお、1994年に代表を務めた田中真紀子長官のスピーチは英語で堂々たるものだったと耳にしている。聞きたかったものと思っている。

望、目標等が議論される。

なお、I A E Aの予算は2年単位である。例えば、2002/2003の予算なら業務計画を2001年秋の総会で承認を得る。そのために事前の理事会審議にかけるため2000年春頃から担当レベルでの原案作りが始まる。つまり、起案から実行まで1年半乃至3年かかる。途中で軌道修正をするには手続きは容易でない。国際機関特有の硬直性が壁となって小回りが利かないのだ。これは、別項で述べる職員の契約期間と関連して問題を孕んでいる。計画段階の職員がいなくなっていて、計画に関与しなかった新しい職員が実行者になるケースが少なくないのである。私が着任した時も計画は既に存在していて、私は実行役。実施項目の由来や背景を知らずに適切に実行するのは難しい。自分で計画して実行できるのはその次の予算サイクル、つまり早くして着任後3年目となる。担当者としてはストレスを感じずのメカニズムである。

#### ・私の職場

私の職場はエネルギー局原子力発電部原子力技術開発課である。この課は最新の原子炉技術情報交換を主任務として炉型別とその応用のプロジェクト（日立流に言えば作番）で構成される。私の所掌は原子炉を応用とした「コジェネレーションと熱利用」で、その中の主要テーマが「海水淡水化への原子力の利用」である。

世界には飲み水を始めとする淡水源に飢えている国、地域が多く、人口増や都市化と共にその地域が拡大している<sup>5</sup>。しかもそのような地域は開発途上国が主でエネルギーも必要とする。サウジアラビアなどは豊富な石油を燃料として海水から蒸発法で淡水を回収するようになった。（写真、公務で訪ねたアブダビの海岸：緑は海水から回収した淡水のお陰）しかし、水を得るためだけに石油を燃やすのは無駄なのでこの過程で電気も作る。日本では考えにくい、電気は水を作る副産物に近い。電力予備率が50%以上と聞いて、予備率2～3%の確保に苦勞する日本を思って驚いたものだ。一方で石油もない国はどうか。石油があっても地球温暖化問題や資源有効利用のため他のエネルギー源を考える国は多い。そこに原子力の熱利用が結びついて、I A E Aの検討テーマとして定着してきた。



このテーマには、エネルギーと水を必要とする原子力導入側と、原子力の輸出を視野におく国が関心を示している。前者では北アフリカを始めとするアラビア諸国、東南アジア、南米の幾つかの国、後者では

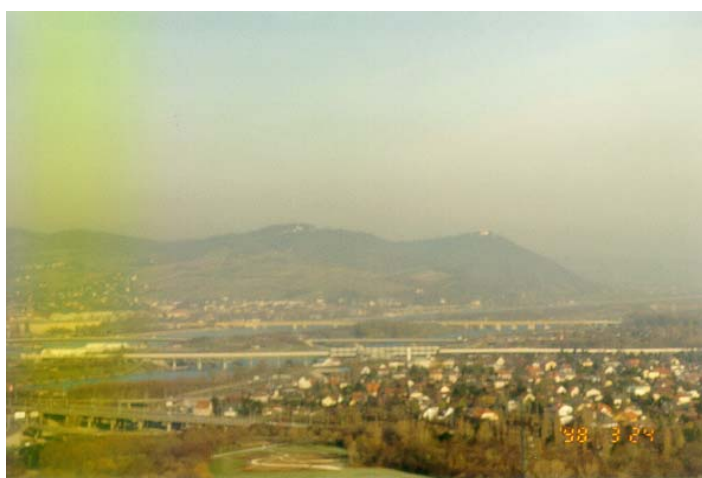
<sup>5</sup> 日本では毎日一人当たり約400リットルの真水を生活に使用している。世界の水事情からは例外的ですらある。ウィーンでは250リットル。しかし、多くの国では100リットルを切り、しかも低質である。公務で訪ねた中東の砂漠国や旧ソ連カザクスタンでの一人当たり「真水」消費量は日本の約1/10である。真水使用量の伸び率は人口増を上回る。今世紀、人の平均寿命が飛躍的に伸びたのは医療技術以前に生活用水の回収・分配システムの改善に依るところ大と言う。開発途上国の真水確保は国連挙げての緊急課題になっている。今世紀は油の取りあい、来世紀は「水」が紛争の種だとの見方もある。無尽蔵の海水から真水を回収する淡水化技術は今世紀半ば実用化され、今ではアラビア諸国を中心に定着し、必要とする地域はアフリカ、アジア、南米に急速に広がっている。その海水淡水化にエネルギー源の立場から原子力が如何に貢献できるかという訳である。



韓国、ロシアを筆頭にカナダ、アルゼンチン、中国等が自国技術の売り込みに熱心である。目の前のビジネス性が不透明とみるのか、日本はこれらの国に比べると積極性に乏しい。カザクスタンの高速炉BN350が閉鎖された現在、唯一日本だけが原子力淡水化施設を実動させており、その順調な運転と原子力技術への信頼は高いのだから積極的に取り組めば将来性は高い。原子力淡水化を考える国が開発途上国中心であり、投入資金の限度、電力網の容量制限、基盤技術の制限等から、対象は中小型原子炉に傾斜している。IAEAの役割は会議や刊行物を通して、これらの関心ある国への情報提供、エネルギー源による経済性比較、そして原子力導入国への技術移転を支援することである。そこに、「原子力平和利用の推進とその担保」が顔を出す。

#### ・国連という職場

国連のどの組織も原則は有期契約であり、その多くは比較的短期の契約である。契約は本人個人との契約で、派遣元からのいわゆる「出向」ではない。



私はまず三年契約で赴任した。その後の延長は、本人の希望と適性、業務上の必要性を見て2年目に決定される。普通これはあまり問題なく認められ、通常は二年の延長で通算五年となる。有期契約の上限は七年だが、五年後の再延長はかなり門戸が狭く、個々のケースで審理される。

(写真、居室からドナウ越しに見るカーレンベルクの丘)

多くの人は5年が限度で、その前から別の職場を求めて応募する。新しい職場は同じ機関の別部門でもよいし、別の機関でもよい。これは秘書等の一般職も同様で、空席情報を自分で探して「渡り歩く」。ポストは全て「公募」が建て前で空席情報はインターネット上で誰もがアクセスできる。国連本部のあるニューヨークやジュネーブとの間で人の移動が多い。夫婦で離れて別の機関で活躍している国連マンは日本人にも多い。有期契約制度を採るのは、最新技術の人材を確保するためだという。国連組織共通の傾向として一般的には、開発途上国・女性の応募者が優遇される。特に、上級職・管理職への登用が考慮因子となっている。が、IAEAには原子力と言う特殊性もある。女性職員は一般職が多いが、安全部長を始め要職も居る。全体で半数近くが女性である。

私の場合、5年後の再延長には迷いもあった。再延長の保障はないし、赴任前に何人かの先輩から「定年前の帰国を」と助言を貰っていたからだ。定年後もできれば何かの仕事を続けたい、それには定年前には帰国したいと自分では決めていた。しかし、その時期が近づいてみると「続けられるのなら続けた方が」と別の助言も幹部の方から頂戴した。結論は相手に委ねる事にし、「今までの私の業績はIAEAに寄与したと評価してくれるのか。さらにこの後の2年で寄与できると評価してくれるのなら残ろう。」と私の意を伝えた。結果は、IAEAの規定定年に達する2003年3月までの再延長が決まった。通算7年7カ月で、有期契約としては異例の長さである。たまたまの年齢と日本人幹部を始めとする関係者の支援、それと私自身の努力もあってのことと解釈している。そしてこの3月、IAEA勤務中に日立製作所での定年を迎えることになった。国連のポストに応募する時の考慮因子は「有期契約の期間が通常5年、長くて7年、そして定年は62」の規定であろう。したがって、定年をここで迎える気なら55歳が一応の限度、

帰国後再度職場復帰して経験を反映するなら 50 歳まで、それも早い方がよい。最近私の担当業務に増員が認められ、日本からの応募者もいたが残念ながら 59, 60 という年齢で篩い落とされた。

給料は下がる。が、生活に困ることはない。ヨーロッパ内ではスイスに次いで物価が高いと評判のオーストリアだが、経済的に暮らせる社会のようだ。交通料金、飲み屋の費用も日本に比べて格段に安い。国連職員には税金免除の特典もある。これについては、「生活編」でも言及したい。大雑把に言って私の場合、住宅・光熱費 25 万、食費 10 万、その他合わせて月々の支出が 50 万弱か。家族のある人は勿論もっと多いだろう。

振り返ってみて、IAEAで「真水」と言う人類全体の身近な問題に携わることができ、大きな張り合いを感じている。日本の原子力開発の中で育った経験を国連機関の場で生かせることができ幸せだったと感じている。五年前、「日立から初めて」と暖かく送り出してくれた関係者への感謝の気持ちが新たである。



(写真、職場にて)

少し堅い話になった。次回は個人レベルの環境を中心に書きたい。